

# 京都・洛中の「野畠」に関する 歴史地理学的研究

伊 藤 寿 和

## 一 はじめに

本稿は、古代・中世において日本を代表する大都市であった京都の洛中に広く所在していた「都市の野畠」に検討を加える初めての論考である。前稿<sup>1)</sup>においては、日本全域を対象として、主に平安・鎌倉時代における「野畠」の地目の存在とその概要を明らかにするための史料紹介と検討を加えた。それによれば、新たに見出した地目としての「野畠」は、毎年耕作される安定的な常畠ではなく、野と畠としての土地利用を不定期に繰り返す不安定かつ粗放的な畠であることが判明した。「野畠」は、すでに平安後期から存在し、中世を通じて関連史料が存在し、公的な地目として鎌倉幕府からも認定され、その存在は江戸時代以後にも引き継がれ、正式な検地の地目として継承されてゆくことを明らかにした。

その際に主な事例としたのは、関東地方の洪積台地や九州地方の阿蘇山麓など、「地方の野畠」であった。これに対して、本稿で検討を加えるのは、古代・中世において、日本最大の都市であった京都の中心地、すなわち、洛中と称された、まさに、「都市の野畠」に関する史料を紹介し、初めて検討を加えるものである。

筆者が、この「都市の野畠」の存在に気付いたのは、足利健亮氏編の『京都歴史アトラス』<sup>2)</sup>において、学会周知の著名な「寛永後万治前洛中絵図」の詳細な翻刻図が作成・掲載されていたことによる。もとより、この洛中絵図に「野畠」の文字が記載されていることは、京都を研究するものにとっては周知のことではあるが、大都市である京都の洛中に「野畠」の文字が記載され、存在している意味を検討した専論は存在していない。

ただし、同じく洛中に存在した大路・小路を開発して、田や屋敷地になした「巷所」に関しては、数少ない先行研究として仲村 研氏<sup>3)</sup>と馬田綾子氏<sup>4)</sup>のものがあるが、洛中に広範に所在していた「野畠」と、都市内における農業に関して具体的な言及はなされていない。管見の範囲においては、木村茂光氏<sup>5)</sup>が鎌倉時代の差図を活用して、「巷所」で営まれていた多様な都市農業の実態の一端を検討されている。

以下、本稿においては、中世の大都市・京都の洛中に広範に所在していた「都市の野畠」に関する史料の紹介と基礎的な検討を加えることとしたい。

## 二 「寛永以後萬治前洛中絵図」に描かれた「野畠」

京都・洛中における「都市の野畠」を検討する場合、最も基準となすべき史料としての絵図は、著名な「寛永後万治前洛中絵図（寛永十四年洛中絵図）」<sup>6)</sup>であると判断される。この洛中絵図に関しては、すでに金田章裕氏<sup>7)</sup>が詳細な概要をまとめられている。以下、金田氏がまとめられた概要の一端を引いておきたい。

この洛中絵図は、宮内庁書陵部と京都大学附属図書館に所蔵されており、両絵図共にきわめて大きな手書きの洛中絵図であり、本来は畿内総大工頭を称した大和国出身の中井家に伝えられた誠に貴重な洛中絵図である。特に貴重であると判断されるのは、先行する「洛中洛外図屏風」のような鳥観図的に描かれた概要図ではなく、寛永十四年（一六三七）に幕府の命によって洛中の実態を把握するために実測の上で作成された絵図である可能性が高い点にある。

書陵部所蔵の「寛永十四年洛中絵図」は縮尺千六百二十五分の一で、京都大学附属図書館所蔵の「寛永後万治前洛中絵図」（以後、「洛中絵図」と略記）は縮尺千三百六十八分の一の縮尺で作成されており、恐らくは京都所司代に提出された清書絵図の控え図であろうと想定されている。京の町全体が詳細に描かれ、二重線が周囲を取り巻いているのが特徴である。もとより、この二重線は豊臣秀吉が天正十九年（一五九一）に築造した大規模な「御土居」である。周囲約二十二Km余もの長さをもって築造された「御土居」は、北は大徳寺のさらに北から、南は東寺にまで及ぶものであった。「御土居」の底幅は約二十m、外に約二十mの堀が巡らされていた。洛中図には広大な二条城が描かれ、その北西には京都所司代の広大な屋敷地が描かれており、城下町となった京都の姿が実測図として描かれている。洛中絵図に描かれている武家屋敷は百五十一軒、公家屋敷は百六十九軒に及び、当時の街区も詳細に描かれ、処々にその長さが注記されている。

金田氏はこの「洛中絵図」の概説において、街区の周辺に記載されている農業関連の事柄に関して、「町と街路などが細かに記入されていますが、大徳寺周辺、二条城西方から東寺周辺にかけては田、畠、野畠、山林、林、藪などが多く、市街地が描かれていないのが目につきます。」と記載され、もとより、御土居内に広大に所在していた「都市の野畠」の存在に気づかれている。

図1として示したように、「洛中絵図」の北方に描かれた大徳寺の東には広大な「野畠」が存在していた。また、大徳寺の南西に位置する船岡山の周囲にも「野畠」が散在しており、大局的に見れば、洛中の北域に最も広く所在していたのは「野畠」である。同じく、洛中のほぼ中央に描かれている二条城の西南域にも広大な「野畠」が記載されている。さらに、その中間にあたる京都所司代の屋敷の北西にもある程度のまとまった「野畠」が描かれており、実測によって作成された「洛中絵図」において、少なめに見ても面積的には洛中の一割以上を占める広大な「都市の野畠」が存在していたことが判明する。

前稿では主に地方に位置する「農村の野畠」の紹介と検討をなしたが、この「洛中絵図」により、中世以来、大都市・京都の市街地の近郊にも広大な「都市の野畠」が存在し続けていたことの意味とその重要性を再認識しなければならないと判断されよう。

なお、念のために記しておけば、「洛中絵図」の南部、すなわち、東寺の周辺には、ある程度まとまった田畠が存在していた点も留意しておく必要があろう。

では、近世以後、御土居内に広範に所在していた「都市の野畠」は減少・消滅したのであろうか。この点に関しても、近世以後に版行された京都が描かれた絵図が有効である。

近世に刊行された京都の絵図は数多くあるが、その一例として元禄四年（一六九一）の「京大絵図」<sup>8)</sup>・図2を上げておきたい。この絵図は、それまでに刊行されていた著名な「寛永平安古図」や「平安城東西南北街並之図」などの絵図が縦長であったのに対して、正方形に近いもの（百六十四cm×百二十二cm）となっている。そして、それまでの絵図が町屋を黒く塗りつぶしていたものから白地となり、図面が明るくなっている。京の町を取り巻く周囲の山々には緑が、寺社は丹色で手彩色されており、京都を描く都市図としての転換点と認められようか。特に注目したいのは、この絵図において、黒く太い線で描かれた御土居の内側に、何も描かれず、文字の記載もなされていない地域が少なからず存在していることである。その空白の地域は、大きく三か所に分かれる。その三か所とは、先に述べた大徳寺の北域と船岡山の周辺と、二条城の西域と、南端の東寺の周辺地域である。この空白地域は「野畠」又は「畑」であると想定される。

近世の絵図は、それ以前の版をそのまま踏襲して刊行されるものも多く、その意味からも十分な注意を有するが、この元禄四年（一六九一）に刊行された「京大絵図」が当時の景観の実態を描いたものであるならば、元禄年間に下ってもなお、御土居に囲まれた洛中の内部がすべて町屋や寺社地で埋め尽くされた訳ではなく、洛中の北域と西域には、なお広い「野畠」や「畑」が所在していた可能性が高いと想定されよう。そして、洛南の空白域は、東寺周辺で営まれていた田と畠であると想定することができよう。

次いで紹介・検討すべき近世に刊行された絵図は、近世中期の安永三年（一七七四）の「懷宝京絵図」<sup>9)</sup>・図3である。上記の「野畠」の文字が明記された「寛永後万治前洛中絵図」（一六三七）より百三十七年後の絵図であり、この絵図においては、洛中の北域と西域になお広く存在していた空白の地域に「井」の記号と共に「畑」の文字が明確に刻まれている。近世前期においては不安定な「野畠」であった土地利用の地域が、施肥などの努力により安定的な常畠としての「畑」に成熟した可能性が高いが、残念ながら、管見の範囲においては、その転換を明記する関連史料に巡り会えていない。

最後に紹介するのは明治初期に刊行された「上下京両組一覧之図」<sup>10)</sup>・図4である。この絵図においては、洛中の北域の大徳寺以北の地域は空白のままになっており、文字の記載がなされていない。洛中の西域の空白域にはカタカナにて「ハタ」の記載がなされている。

以上のように、寛永十四年（一六三七）に実測の上で描かれた「寛永後万治前洛中絵図」に明確に、その存在の記載がなされていた洛中の北域と西域においては、近世の中期に至るまで、中世以来の不安定な野と畠の土地利用を繰り返す「都市の野畠」が広範に所在していたことが明らかとなった。その御土居内の洛中に広く所在していた「都市の野畠」は、恐らく、近世中期以後、安定的な常畠としての「畑」に成熟すると想定されるが、明治に下ってもなお、「都市の野畠」に由来する洛中の「畑」は広範に所在し、洛中に居住する農民たちによって耕作され続けていたのである。

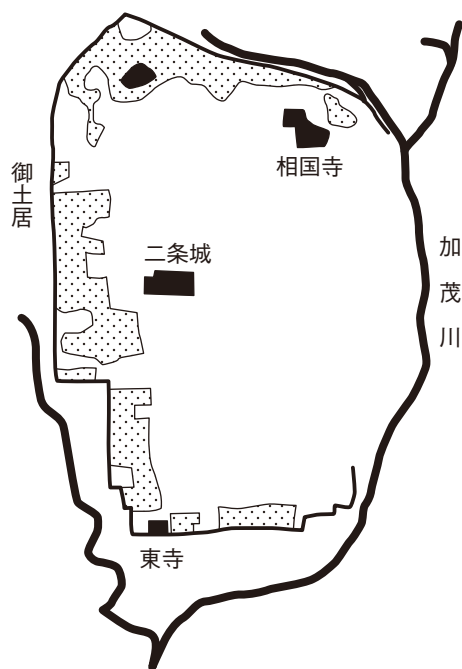


図2 「京大絵図」の「畑」想定地

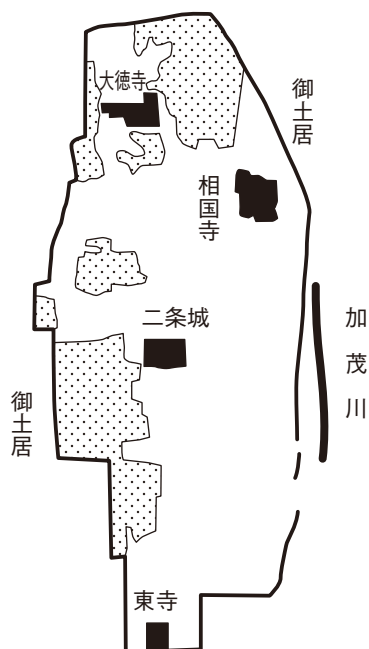


図1 「寛永後万治前洛中絵図」の「野畠」

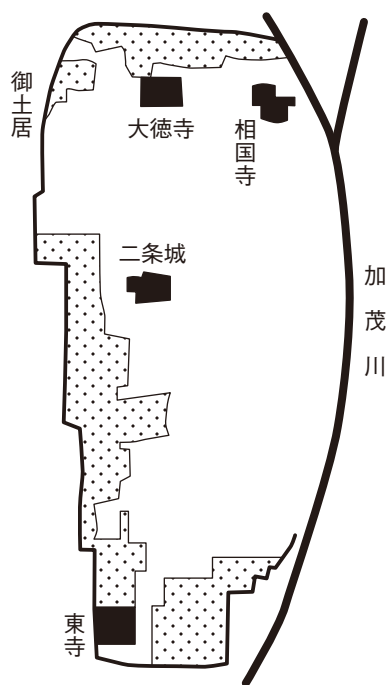


図4 「上下京両組一覽之図」の「ハタ」

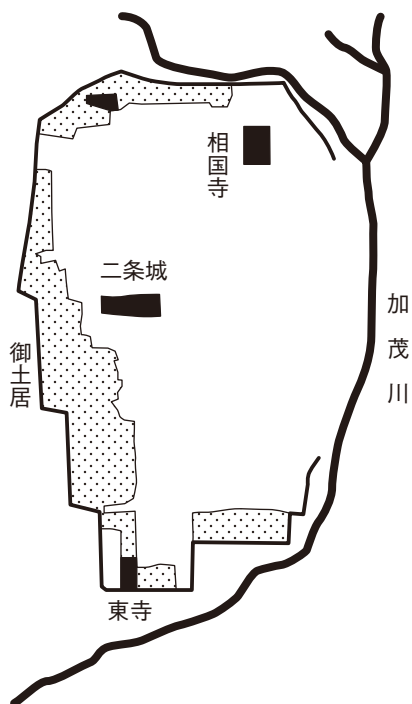


図3 「懷宝京絵図」の「畑」

### 三 文書に記載された「野畠」

秀吉によって天正十九年（一五九一）年に御土居が築造され、明確な洛中・洛外を区切る景観が成立する以前から、すでに、中世後期には、「洛中・洛外」の認識が成立していた。文明十一年（一四八〇）に内裏修理のために洛中・洛外に対して棟別銭をかけるに際して、すでに、それに先立つ文安三年（一四四六）にも同様に内裏の造営のために洛中・洛外に棟別銭を懸けていたことが判明している。ただし、当該の史料<sup>11)</sup>は、残念ながら後欠となっており、具体的にどの範囲を洛中と認識していたかは判明しない。

以下においては、便宜的ながら、御土居によって囲まれた範囲を凡そ中世後期の洛中と想定して、その地域内において営まれていた「都市の野畠」について、関連する史料を引きながら検討を加えてゆきたい。

#### 三の一 「野畠」の地目の成立と売買・相伝

すでに戦国時代以前から洛中において「野畠」の地目が成立していた。次に引く史料から、その点は明瞭である。

史料一 幕府奉行連署地口銭免除状（文明十八年・一四八六）<sup>12)</sup>

紫野 大徳寺同徳禅寺并門前之屋地等目録之事

合肆拾式丈余、両所仁在之、内拾参丈野畠云、（後 略）

この文書は、洛北に位置する大徳寺と徳禅寺の両寺の門前に形成されていた門前町四十二丈余に対して、室町幕府の奉行人二人が連署して、地口銭を免除するに際して作成・発給されたものである。特に留意すべきは、大徳寺と徳禅寺の二か所の門前に形成されていた門前町四十二丈余のうち、約三割に当たる十三丈が「野畠」と認識されていたことである。すなわち、「野畠」を所有する大徳寺はもとより、地口銭や棟別銭を懸ける室町幕府においても、公的な地目として「野畠」が成立・認識されていたことが判明する。

史料二 瑞峯院并寮舎末寺門前前田畠指出帳（年未詳）<sup>13)</sup>

紫竹前「畠」

壺所八斗五升 此草畠ニ両季ニ七拾文出之、 新兵衛 畠地子

この史料によれば、幕府において「野畠」の地目が正式に成立・認識されていたことの反映として、「野畠」ではなく、草が生えている土地が別途認識され、田畑への刈敷の肥料として、牛馬へ与える飼料としての価値を有する土地が「草畠」の地目として成立し、広義の畠地子が課されていたことが判明する。洛中・洛外に広範に所在していた「野畠」や「草畠」は、価値ある土地として認識・課税されていた点には、十分な留意が必要である。

それゆえ、洛中の町中に散在していた「野畠」を、屋敷地や畠と同じく、価値ある土地として購入する事例も散見される。

史料三 大徳寺方下知奉書案（永徳元年・一四八九）<sup>14)</sup>

大和大路以西楊原屋敷并野畠間事金山院買売相伝之处 （後 略）

大和大路以西に所在していた楊原屋敷と「野畠」を金山院が買得・相伝していたことが判明す

る。この他にも、価値ある土地としての洛中の「野畠」を巡り、長年にわたり、相論に及んでいる事例も散見される。

### 三の二 「野畠」への課税

洛中には、当初から野と不安定な「野畠」を繰り返す本来の「野畠」が近郊に広がっていたが、一方では、洛中の町中において、町屋敷が無住となり、その屋敷地が開発されて「野畠」として耕作・利用されていた事例も数多く散見される。

史料四 如意庵雑掌二問状案（天文七年・一五三八）<sup>15)</sup>

一 如千秋晴季支状者、洛中土御門万里小路四町と内屋敷地分事、一旦居住ト差申事、不可限私之儀、不審之申状也、可被尋聞召哉云々、既無住宅為野畠之上者、一旦居住之段勿論也、（後 略）

洛中の町中に散在していた「都市の野畠」に関しては、基本的には他の屋敷地と同様に地子銭が課されていた。それを示すのが次の史料である。

史料五 土御門四丁町野畠証文（天文八年・一五三九）<sup>16)</sup>

紫野大徳寺塔頭如意庵雑掌申、正親町万里小路四丁町内野畠在之、然彼地子銭納取之云、子細何事哉、（後 略）

土御門（正親町万里小路）四丁町内に所在していた「野畠」の「地子銭」に関して、上山入道に対して、本来の所有者である大徳寺塔頭の如意庵に返付するように、室町幕府の奉行が連署して発行した問状の案である。この地の「野畠」をめぐっては、上山入道の縁者と称する唐木崎氏を巻き込んで、数年に及ぶ相論が繰り返されている。

洛中に散在していた「野畠」の地子銭に関しては、その寺社にとっての収入源としての重要性も認識しておかねばならない。次に引く差出帳は、その意味から重要であると判断されよう。指出帳から「野畠」のみを掲出しておきたい。

史料六 瑞峯院并寮舎末寺門前田畠差出帳（年未詳）<sup>17)</sup>

草畠「畠」

壺所九斗 此外壺斗五升加茂へ出之、 野畠兩季地子

御所田「畠」

壺所七斗六升 此外八升浦野へ出之、 彦次郎 野畠兩季地子

六条室町「畠」

壺所八斗 野畠兩季分「六条へ指出」 中村宗安

少将院前「畠」

壺所四石七斗八升「指出」 野畠地子 兩季分

天神厨子出口「畠」

壺所四石七斗六升 野畠地子

この指出帳に記載されている瑞峯院領は、田百九十六石余・畠二十五石余である。すなわち、総計としてまとめられている畠二十五石余のうち、半ばに近い十二石（四十七%）に相当する上記5筆を「野畠」が占めており、その重要性は明らかであろう。

さらに、洛中を支配した信長も、次の史料に示すように、洛中・洛外に広範に所在していた「野



畠」を存知しており、課税・免除していたことが判明する。

史料四 正実坊掟運宛朱印状（天正元年・一五七三）<sup>18)</sup>

- 一、拾壹石余、白蓮社寺分、付、山林在之、
  - 二、拾八貫七百余、**野畠地子錢**、字富波分・大坂分・粉河分、
  - 三、拾壹石七斗、八瀬庄内買得分年貢・同公事錢等、
  - 四、參石余、船岡分并就学寺内茨木分、
  - 五、納錢方請之本知十分の一之事、但員数年々不足、
- 都合四拾參貫七百余、

右任当知行之旨、全領知不可相違之条如件、

天正元

十一月廿八日

正実坊

信長（朱印）

この史料は、室町幕府納錢方の有力者であった正実坊に対して、幕府滅亡後において、京都付近に散在していた信長の直轄領の年貢納入に関するにあたり、正実坊の知行分を安堵した信長の朱印状である。正実坊の知行分全体が四十三貫七百余であるのに対して、「野畠」の地子錢は十八貫七百余であり、その割合は正実坊の知行分全体の半ばに近い約四十三%も占めている。信長の政權下においても、広範に所在していた「野畠」の占める重要性を十分認知していたと判断されよう。

#### 四 六条八幡宮領の「野畠」

洛中に広範に所在していた「都市の野畠」の所有の実態に関しては、管見の範囲においては、唯一、六条八幡宮に関する一連の史料に記載がなされており、経年的な所有の実態を明らかにすることが可能である。

六条八幡宮は、天喜元年（一〇五三）に源頼義が西洞院の自邸内に石清水八幡宮の若宮を造営したことに始まると伝えられている。当社は六条若宮・六条左女牛八幡宮とも称されていた。造営以来、源氏の氏神として厚く信仰され、文治二年（一一八七）には鎌倉幕府によって大規模な社殿の造営がおこなわれた。室町幕府においても、三条坊門の御所八幡宮と並んで歴代將軍の社参がおこなわれ、石清水八幡宮に次いで室町幕府の崇敬を得ていた。京都では、祇園社・北野社に次ぐ規模を有していたが、天正十一年（一五八三）、秀吉により現在の西本願寺の地（図5）にあった旧地から五条橋の東に位置する東山の御旅所に移され、秀吉没後の慶長十年（一六〇五）に現在の東山区五条橋東五丁目の地に再度移されて現在に至り、若宮八幡宮社と呼ばれている。

六条八幡宮に関しては、応永二十四年（一四一七）・永享七年（一四三五）・文安二年（一四四五）の三か年にわたり、室町幕府が六条八幡宮の洛中所領に対して地口錢を免除した文書が残されており、その全体像が判明する稀有の事例である。

応永二十四年（一四一七）<sup>19)</sup>では、洛中の所領として書き上げられている地所は、社人・神人・八乙女・雑掌・職掌など八幡宮領の屋敷地が二十八字、屋敷地ではない地所が三十九か所、清目分の地所が七か所、そして、二十六か所に散在していた「野畠」（表1）が書き上げられている。

表1 六条八幡宮領「野畠」の所在地と間口数

樋口櫛笥与壬生之間南頰口・2丈
佐女牛油少路与西洞院之間南頰・5丈5尺
同西洞院北角西角・3丈
同七丈坊門之間西洞院面口・2丈4尺
同油少路与七丈坊門之間東頰口・3丈6尺
七条坊門西洞院北角西角・南北24丈・東西30丈
七条坊門西洞院東角南角口・5丈3尺
北少路西洞院北角東角・南北7丈・東西11丈
同東洞院面東頰北角口・13丈
同西頰西南角口・22丈・奥20丈
同櫛笥壬生之間北頰・5丈
七条坊門室町与町之間口・1丈3尺
同猪熊以北東頰口・2丈2尺
同烏丸与室町之間南頰口・4丈
七条坊門室町与町之間北頰・(欠)
北少路大宮七条坊門之間西頰口・2丈
七条櫛笥与大宮之間南頰口・2丈5尺
塩少路大宮南西面口・6丈6尺
同北西面口・5丈
同櫛笥間北面口・5丈5尺
同七条間東西・20丈
同猪熊之間南面口・5丈
塩少路与西洞院之間南頰口・4丈
佐女牛油少路角西頰口南北・9丈
八条室町面東頰口・2丈1尺

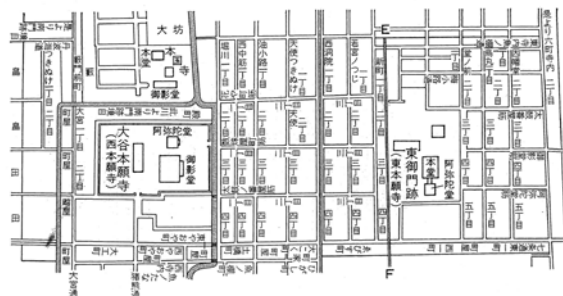


図5 東西の本願寺（注22より引用）

永享七年（一四三五）<sup>20)</sup>には同じく二十九か所の「野畠」が、文安二年（一四四五）<sup>21)</sup>には十八か所の「野畠」が書き上げられている。応永二十四年（一四一七）の三十九か所の地所のうち、六か所は間口の記載を欠いているが、記載がなされている間口の合計は百三十九丈八尺五寸であり、永享七年の二十九か所のうち、一か所の記載を欠いている「野畠」の間口の合計は百六十六丈である。そのように、洛中有数の大社であった六条八幡宮領に占める「野畠」が占めていた割合は高く、同宮が買得・寄進によって集積した「都市の野畠」の重要性は明らかである。秀吉による御土居の建設に先立って、二年前の天正十七年（一五八九）には、洛中が上京と下京に分けられて、それぞれ五名の検地奉行により厳しい検地を受けている。洛中の町中に散

在していた「都市の野畠」も、当然のこととして、検地の対象になったと判断されよう。

なお、残念ながら、管見の範囲においては、洛中・洛外の「野畠」で栽培されていた具体的な作物に関する詳細な関連史料には未だ巡り会えていない。仲村氏の研究により、同じ洛中に所在していた大路・小路を開発した「巷所」では一般的な田畠の他に、「井田」すなわち畳や燈心の原料となる藺草を栽培する「藺田」として利用していたことが明らかにされている。また、近世前期に編纂・刊行された『毛吹草』<sup>22)</sup>によれば、京の名産として、八条の「浅瓜」と九条の「直桑（まくわうり・筆者注）」「青瓜」「芋」「水菜」「藍」などが記載されている。これらの作物は、洛南の東寺周辺に所在していた安定した田畠の作物であり、野と畠としての土地利用を不定期に繰り返していた「野畠」で栽培されていた具体的な作物名は不詳である。

なお、前稿<sup>23)</sup>にて紹介・検討を加えた「野畠」における栽培状況を詳細に記載した稀有の史料である正平八年（一三五三）の「健軍社領野畠検見目録」（阿蘇家文書）には、現在の熊本市の南部から南西部にかけて所在していた十三か所・百六十三町余の「野畠」が書き上げられている。その内訳は、冬作の麦が約二十%、夏作物としては粟・稗・野稲・大豆・小豆・桑・麻・など、実に多様な作物が栽培されていたことが判明する。健軍社領の概要は、田地約二百三十町余・畠地約四十七町余・野畠約百六十三町余、その割合は田地約五十%・畠地約十%・「野畠」約三十五



%であり、「野畠」が占めていた重要性は明らかである。

本稿で検討した洛中に所在していた「都市の野畠」に関しても、関連資料の探求を続けて、栽培作物の実態を明らかにしたい。

## 五 まとめに

本稿は、前稿で論じた「地方の野畠」に対して、大都市・京都の洛中に所在していた「都市の野畠」に関して、初めての検討を加えたものである。その成果は、以下のようにまとめることができる。

第一に、学会周知の寛永十四年（一六三七年）に幕府の命により実測に基づいて作成されたと想定される「寛永後万治前洛中絵図」には、天正十九年（一五九一）に築造された御土居が明瞭に描かれている。その御土居に囲まれた洛中のうちに、約一割以上の面積を有する「野畠」が描かれている。その洛中に所在していた「都市の野畠」は、北域に位置する大徳寺の東部から北にかけてと、二条城の西に位置する地域の二つの地域にまとまって所在していた。

その「都市の野畠」は、元禄四年（一六九一）に刊行された「京大絵図」や近世中期の安永三年（一七七四）刊行の「懷宝京絵図」はもとより、明治初期に刊行された「上下京両組一覽之図」においても「畑」や「ハタ」として所在し続けていた。洛中における「都市の野畠」の系譜を引く「都市の畑」は、中世から明治期に至るまで一貫して所在し続けていたのである。

第二に、洛中に広く所在していた「野畠」は、室町幕府にも公式な「地目」として認識がなされ、多くの寺社などが「野畠」を売得し、寺社への寄進もなされていた。また、「野畠」には屋敷地と同様に「地子銭」、後には年貢が課され、少なからざる額を「野畠」が占めていた事例も散見される。

第三に、京における源氏の鎮守社である六条八幡宮領に関しては、応永二十四年（一四一七）・永享七年（一四三五）・文安二年（一四四五）の三か年にわたる詳細な所領目録が残されている。それによれば、洛中有数の大社であった六条八幡宮領に占める「野畠」の割合は高く、同宮が買得・寄進によって集積した「都市の野畠」の重要性が明らかとなった。

ただ、残念ながら、洛中に広範に所在していた「都市の野畠」で栽培されていた具体的な作物を記載した関連史料は未だ見出せていない。さらに調査を継続し、その実態を解明したいと念じている。

付記 長年にわたりますご厚誼とご教示に感謝申し上げます、木村茂光先生・溝口常俊先生・海老沢 衷先生に、本稿を謹んで献呈させていただきます。

## 注および参考文献

- 1) 伊藤寿和（一九九五）A「古代・中世の『野畠』に関する歴史地理学的研究」、日本女子大学大学院文学研究科紀要、一号。  
     同 （一九九六）B「古代・中世の畠作と畠制度に関する基礎的研究」、条里制研究、十二号。  
     同 （二〇〇二）C「『武蔵国鶴見寺尾郷図』に関する歴史地理学的研究」、日本女子大学紀要・文学部、五十一号。

- 2) 足利健亮編（一九九四）『京都歴史アトラス』、中央公論社。
- 3) 仲村 研（一九六八）「中世京都における巷所について―東寺領巷所を中心に―」、人文科学、十号。
- 4) 馬田綾子（一九七五）「東寺領巷所一荘園領主による都市支配の一考察」、日本史研究、百五十九号。
- 5) 木村茂光（一九九二）「中世前期の農業生産力と畠作」、『日本古代・中世畠作史の研究』、第四章、校倉書房。
- 6) 京都大学附属図書館所蔵。同大学附属図書館のデジタルアーカイブにて公開がなされており、拡大して細部に至るまで閲覧することが可能である。
- 7) 金田章裕（二〇一六）『古地図で見る京都』、平凡社。
- 8) 矢守・大塚編（一九七六）『日本の古地図・四 京都』、講談社。
- 9) 注8）所収。
- 10) 注8）所収。
- 11) 『晴富宿祢記』、文明十一年三月十一日の条、京都市『史料 京都の歴史』、第四卷（市街・生業）所収。
- 12) 『大徳寺文書』・第一卷・五二四号文書。
- 13) 『大徳寺文書』・第五卷・二〇一一号文書。
- 14) 『東寺百合文書』・第五卷・七の十一号文書。
- 15) 『大徳寺文書』・第四卷・一五五三号文書。
- 16) 『大徳寺文書』・第四卷・一五六三号文書。
- 17) 『大徳寺文書』・第五卷・二〇一一号文書。
- 18) 奥野高廣（二〇〇七）『増訂 織田信長文書の研究』上巻、吉川弘文館。
- 19) 『醍醐寺文書』・第十二卷・二六〇六号文書。
- 20) 『醍醐寺文書』・第十二卷・二六〇九号文書。
- 21) 『醍醐寺文書』・第十二卷・二六〇八号文書。
- 22) 京都市『史料 京都の歴史』、第四卷（市街・生業）所収。
- 23) 京都市『史料 京都の歴史』、第十二卷（下京区）所収。
- 24) 注1）のA。